翻訳

ポンチュー伯の息女（作者不詳）

岩本修巳

一

昔、ポンチューに一人の伯爵が居た。伯爵は浮き世の事どもを愛していた。同じ頃サン・ポルの殿は年老いていた。殿に直系の世継ぎはなかったが、妹がおり、ポンチューはドマールの女領主だった。この貴婦人に一人息子があって名をチボーと言い、サン・ポル伯領の相続権者だった。とは言え伯父が存命中は貧しい、知行無しの騎士にすぎない。ポンチュー伯には奥方があってこれが実に立派な貴婦人、娘が一人あり、この姫はすくすくと大層立派に成長された。十六才になったのだが、実は生後三年目に生母をなくし、伯爵は程経ずして再婚したのである。そうして間もなく男子が誕生し、立派に育った。

二

伯爵はチボー殿に会い、家中へと呼び寄せた。チボー殿を手元に迎えた伯爵は大層喜んだ。ある騎馬試合（トゥルノワ）の折

り、帰り路で伯爵は、ふとチボー殿に話しかけ、こう問うた「チボー君、わが領地のうちで、何を一番貴く、好ましく思われるかな。」チボーは答えて、「殿、拙者は貧しい無知行の騎士でありますが、ご領地のあらゆる貴く好ましき物も、お姫様に増して愛おしく思われるものはご座居ませぬ。」伯爵は喜んで言った「チボー君、君に姫を与えよう。姫も君を望んで居る。」伯爵は娘の所に赴いてこう言った、「姫、結婚の事は成ったぞ。もし差し障りが無ければ、だが。」「殿様、どなた様と」と息女は問う。「姫よ、良き騎士、ドマールのチボーとだ。」「あい、殿様。例えご領地が伯爵領でなく王国で、妾に何もかも手に入るとしても、それよりあの方と夫婦になれるほうが、ずっと嬉しゅうございますわ。」伯爵言う「姫よ、そなたの心こそ祝福されるように。」

三

結婚式がとり行われた。ポンチュー伯とサン・ポル伯を始めとして大勢の貴き人々が大層な喜びのうちに参集した。

共に楽しい五年間を過したが、神の思召でか子宝に恵まれず、二人は悲しく思っていた。ある夜チボー殿は寝床の中で横になっている時こう考えた、「神様、私がこの女を愛し、彼女もまた私を愛しているというのに、何故神様にとりましても皆の者達にも良き賜物となる子宝に恵まれないのでしょうか。」彼はそこでサン・ジャック様の事を思った。それは真の祈願者には望まれたことを与えて下されたお方だからなのだ。で、この参詣を約束したのである。奥方は眠っていたが、目を覚ますや、殿は彼女を胸に抱いて願い事を頼んだ。「殿様、どんな願い事でございますか。」「私の願い事を確かに叶えてもらえるだろうか。」「殿様、勿論ですとも。何なりと差

し上げます。妾に出来ることでしたら。」彼は言った「奥よ、サン・ジャック様詣での暇が私の願いだ。上人様におすがりして、世継ぎを授かりたいのだ。そうすれば神も聖霊も称えられよう。」彼女は言った、「殿、この願い事は真の騎士に相応しゅうございます。叶えて差し上げましょう。」両人共大いなる喜びに浸った。それから一日、また一日、そして三日目が過ぎたある夜、二人は床に横たわっていた。奥方は殿に言った、「殿様、妾に頂戴したいものがございます。」「奥よ、申してみなさい。私にできることならして上げるから。」「お参りにお供させて頂きとうございます。」チボー殿はそれを聞いて深く悲しんだ。「奥よ、そなたにとっては辛い旅になるのだよ。」彼女は答えて「ご案じ下さいませぬように、妾よりお供の小姓の方が足手まといになりましょう。」「奥よ、叶えてあげよう。」

朝になった。そして知らせは広まり、ポンチュー伯の知る所となって、伯爵はチボー殿にこう尋ねた、「チボー君、噂では巡礼の誓いを立てられたとか。娘はどうなのか。」「殿、いかにも、その通りです。」「君の行くのは結構な事だと存ずるが、娘の事が気にかかるのだ。」「殿、頼まれれば嫌とは申せませぬ。」「チボー君好きな時に出発するがいい。だが急ぐに越した事はない。乗用馬も荷馬も役馬もその他入り用なものを十分に与えて遣わす。」「殿、大層忝けない事でございます。」

四

両名らは勇んで仕度し、出発する。サン・ジャック様からはかれこれ二日足らずの近くまでやって来たある夜、ある立派な町に泊ることになった。その宵、宿の亭主を呼んで、明日の道中の具合を聞いた。亭主は言っ

た、「旦那様、町を出ると間もなくちょっとした森を通り抜けねばなりませんが、そこを過ぎればずうっと良い道になりましょう。」二人は話しを打ち切った。寝床がしつらえられたので就寝した。翌日はよく晴れた。巡礼達は夜明け前に起床して物音を立てた。それでチボー殿は目を覚し、やや気が重く感じられた。彼は小姓に言った、「起きたまえ。一行の者達を起して、荷造りをさせ、先に出立させるのだ。お前はこれに残ってベッドの荷造りをしなさい。私は少々疲れて気分が良くないから。」チボー殿はそう命じ、彼らは出発した。しばらくしてチボー殿も起き上り、小姓は荷造りをし、乗用馬が仕度された。主従は馬に跨った。未だすっかりは明けていなかったが、とても良い天気だった。三人連れは、神のみを供にして町を出、森に近づいた。森に着いた時そこに二本の道があったが、一方は良路、他方は悪路であった。そこでチボー殿は小姓に言った、「拍車をかけて皆に追いつき、迎えに来るように伝えよ。貴婦人にとって、森の中を供を連れず騎行するのは、愉快な事ではないからな。」小姓は全速力で駆けて行った。チボー殿は森に着いて二本の道を見たものの、いずれを行くべきか判らず、奥方に尋ねた、「どちらを参ろうか。」「殿、どうか正しき道の方を。」この森の中には盗賊達が居て、巡礼を誘い込む為に、偽(にせ)の道を拓いていたのだった。チボー殿は馬から降りて道の具合を見たが、本来の道より偽の道の方がより足跡繁く、幅も広く思われたので言った、「奥、神かけて、この道を参るとしよう。」二人は中に入り、たっぷり四分の一里程進んだ。道はその辺りから狭まり始め、枝が低く張っていたので、こう言った、「奥よ、これはどうも先に進めないようだ。」

五

言い終った時、彼の眼前に四人の男が現われた。盗賊らしい武装で、大きい馬に跨り、銘々、槍を携えていた。男達の姿を認めるやチボー殿は背後をふり返ったが、そこには更に四人、先の男達とは違う恰好だが、居るのが見えた。彼は言った、「奥、この有様を恐れることはない。」彼は前方の男達に声をかけて挨拶したが、それに彼らは応えなかった。次いでチボー殿が、自分に対してどうしようと言うのか問うた所、中の一人が、「直ぐに判るさ」、と言い様、剣を繰り出して胴体を刺し貫こうとした。チボー殿はこの一撃を目にして怖れを感じ、体を低くしたので、危うくこれを避けた。逆に、繰り出された剣に素早く手を伸し、盗賊からそれを奪い取った。残る三人の方に向ってその内一人目がけて打ちかかり、これを殺した。振り返っては後に退り、最初に自分に襲いかかった男を刺し殺した。神のご加護によって八人の中三人をこうして打ち果したが、残りの五人は彼を取り囲んで、先ず乗馬を殺したので、チボー殿は傷を受けることなく地面に倒れた。彼は身を守るための剣やその他の武器を持たなかった。彼らは衣服をはがして下着一枚にした上、拍車、馬被いをはがし、剣で革帯を切り取ると、チボー殿の両手両足を括り上げ、棘の茂みの中にほおり込んだ。こう仕終ると、彼らは奥方の方に向った。乗馬を奪い、衣服をはがして下着一枚にした。非常に美しかった奥方だが、さめざめと泣いていた。盗賊の一人が彼女を見やって言った、「お前等、俺は弟を失くしちまったのだ。代りにこの女をもらいてい。」別の一人が言った、「俺様だって、ほん従兄を失くした。お前がそう言うなら、俺だって欲しい。」三人目も同じ事を言い、そして四人目も言った。五人目の男はこう言った、「お前達、この女を取り分にして連れ帰っても大した儲けにはなるまい。それよりか、森の中で、俺達のしたい事を女にする方がましだ。それから女を元に戻して放って置こう。」そのように彼らは行い、元来た所へ帰って行った。

六

それからチボー殿は彼女を見やってこう言った、「奥よ、どうか私の縛めを解いてもらいたい。棘がひどく痛いから。」地面にころがっている剣が奥方の目に入ったが、それは殺された賊のものであった。それをつかみ、チボー殿の所に行って言った、「殿様、自由にして差し上げますことに。」彼女は相手の胴体を突き刺そうと思った。だが彼は切先が自分に向って迫るのを見てそれを恐れ、腕と背が捩れるように、懸命に身を逸らせた。彼女は打ち掛ったが、相手の腕を掠り、革帯を断ち切ったのだった。彼は今や両手が自由になったのを感じ、体を這わせて縛めを解いた。両足で立ち上って言った、「奥、もうお前には殺されまいぞ。」彼女も言った。「いかにも殿様、それが口惜しうございます。」彼は剣を奪い取り、相手の肩を押さえて、元来た道まで連れ戻った。

七

森の入口まで来ると、迎えに来た供のうち大部分の者達が目に入った。皆は主君が裸なのを見て尋ねた、「殿、一体誰がこんな目にお会わせしをったので。」そこでチボー殿は皆に、悪党どもが行く手に現われてこんな始末になった事を話した。皆の者は大いに嘆いたが、直ぐに身なりは整えられ、また馬に乗り、先を進んだ。その日は騎馬で行き、その間チボー殿は奥方に対して一度も険しい顔を見せなかった。その夜、ある立派な町に泊った。チボー殿は宿の主人に尋ねた。「どこか貴婦人を預かってもらえるお寺はないか。」すると主人は答えた、「お誂え向きのがございます。城外にいとも徳の高い尼様がおられますだ。」その夜は過ぎた。翌日チボー殿は

そこへ赴き、ミサに与った。その後で尼僧院長に、奥方を預ってくれるように懇願した。院長は願いを聞き届けてくれた。チボー殿は供の内から幾足りかの人数を奥方のために残して、出立した。参詣をすませ奥方の所に戻った。尼僧院にお布施をして奥方を引き取り、出発した時と同様、きらびやかに、賑々しく国元に連れ帰ったのだが、彼女の床の中で寝ることだけはしなかった。

八

帰国にあたっては、大層な喜び様だった。ポンチュー伯そして伯父のサン・ポル伯も喜ばれた。奥方は貴婦人方に称讃された。その日、ポンチュー伯はチボー殿と、一つの丼で食べた。食事の後でこう言った、「チボー君、婿殿、遠くに行く者にはよくものが見える、と言うものだ。君が見聞きした出来事をひとつ何か話して呉れまいか。」そこでチボー殿は語り聞かせられるような話は一つも無いと答えたが、伯爵が更に重ねて話を請うたので言った、「話す汐が参りましたが、殿、これ程大勢の耳のある所ではお話しする訳には参りません。」伯爵は席を立ち、相手の手を取って脇に連れていった。そこでチボー殿は、一人の騎士とその奥方の身の上に起った出来事を名前を伏せて語ったが、伯爵が、その騎士が奥方を如何に扱ったかを聞いたので、出立の日にさせたと同様に豪奢に賑々しく連れ戻ったが、同じベッドで寝ることだけはしなかった、と述べた。「チボー君、その騎士は私とは違う考えだな。神への信仰をかけて言うが、私なら女の髪か、棘か、それとも馬帯でも使って樹の枝から吊り下げて呉れるところだ。」チボー殿は言った、「殿、奥方が後で自ら言われたのでなければ、信じ難いような出来事でありました。」「チボー君、その騎士が誰なのかご存知か。」「殿、よく存じております。」「誰な

のだ。」と伯爵は問う。チボー答えて、「殿、それは拙者なのです。」「では、この事が起ったのは、我が娘の身の上になのか。」「殿、いかにも。」「チボー君、君が連れて帰ったのだから、その報いを受けるのだ。」怒りを発した彼は奥方を呼び、チボー殿が打ち明けた事が本当なのかと問うた。奥方、「何の事でございますか。」「チボー君を殺そうとしたことじゃ。」答えて、「殿様、左様でございます。」「何故だ。どうしてそんな事をしようと思ったのだ。」彼女は言う。「殿様、そうしなかったのが、今でも口惜しうございます。」

九

伯爵はこの件をそのままにして宴会をお開きにさせたが、それから二日を待たずリュ・スュル・ラ・メールの地に赴き、そこにチボー殿、伯爵の子息、更に奥方を伴った。伯爵は一隻の頑丈堅固な船を用意させて、奥方を乗せ、樽と火と松脂を載せ、三人連れ立って乗船したのだが、彼らを運ぶ水夫以外は供を連れなかった。それから海上をたっぷり二海里漕がせたが、そこまでくると伯爵は樽の底の一方を外から打って開けさせた上で、奥方の手を取った。いとも美しく、しかも着飾っておられたが、樽の中に入らせ、その後で底を打ち閉じ、しっかりと松脂を塗り直し栓をして水が中に入らないようにし、船縁にそれを置き、海中に蹴落し、こうして彼女を風と波とに委ねたのである。チボー殿は悲嘆に暮れたが、彼女の義弟もそれは同じ事だった。二人は伯爵の足下に倒れ伏して懇願した、「願わくは、その苦しみから彼女を許し給え。」と。伯爵はそれには応えようとしない。

十

ところで、伯爵が領地に戻らぬ内に、フランドルの商船が一隻通りかかった。この船はサラセン人の土地に行って一儲けしようというのだが、樽の浮んでいるのを見つけて、一人が言った、「見ろ、空樽だ。船に引き上げれば役に立つかもしれぬ。」そこで人を取りにやらせ、樽は船上に持ってこられた。彼らは樽を眺めた所、底が新しくピッチを塗られているのを見て取った。底を開けてみると、中に奥方が倒れていて今にも死にそうな有様だった。と言うのも生気が無く、首は脹れ、顔は腫れ、眼元は醜かったからだ。生気を取り戻して息を吸い、吐いた。商人たちは彼女を取り囲んで声をかけたが、口をきく力はなかった。生気が戻って話す力がついた時、彼女が彼らに話しかけたので、彼らは一体彼女が誰なのかを尋ねたのだが、彼女は本当の事を隠して、不運と不始末によってこうなったのだと語った。食事をし飲み物を飲み、腫れが引くと大層美しくなった。彼女は嬉しかったが、同時に悲しくもあった。

十一

船は走るように進んでアルメリアの沖合までやってきた。港内に碇泊すると、数隻のガレー船が近付き、何者かと問うので、こう答えた、「我等は商人でございます。」諸侯の発行した通行手形を持っていて、どこへでも安全に行けるのである。奥方を上陸させ、自分達も共に下船したが、彼女をどうしたものか互いに問うた時、ある者は、売るのが良かろうと言った。またある者は、「私を信用するなら、アルメリアのサルタンへ贈り物にしようではないか。そうすれば我々の商いも上手くゆこうというものだ。」皆それに賛成し、奥方の手を取り、サルタンの所へ連れて行った。サルタンは若い男だったが、彼らが彼女を贈り物にすると、大いに喜んで受け取っ

た。彼女が大層美しかったからだ。サルタンは彼女が何者かを問うた。「殿下、私共は存じおりません。が斯々の偶然によって見つけましたものでして。」サルタンは商人達を手厚く扱い、奥方を懇ろに迎えた。彼女は今や固い大地の上に降り、色艶が復してくると、サルタンは彼女を求め、愛おしく思い始めた。通詞を介して、如何なる家柄の者かを答えるように言った。彼女はそれについては真実を話そうとはしない。サルタンは己の見る所、貴婦人に間違いないと考えた。キリスト教徒かどうかを問い正した上で、もし信仰を棄てるなら、妻に迎えたいと伝えさせた。彼女は嫌々それをするよりは、進んでした方がましだとはっきり判っていたので、信仰を棄てると言い切った。彼女が背教した時、サルタンは彼女と結婚した。彼女への愛情は深まるばかりだった。一緒になって間もなく、懐妊し、男の子を産んだ。彼女は人々とよく交わり、サラセンの言葉を解し、話した。それから後、程なくして女子を得た。このようにして二年半、サルタンと共に過し、サラセンの言葉を解し、それを巧みに操った。

十二

さて今度はポンチューの伯爵とチボー殿、そして伯爵の子息の話。伯爵は悲しい物思いに沈み、チボー殿も再婚しようとはしなかった。伯爵の子息は近しい人々の悲嘆を見るにつけ、もう、そうできる年頃であったのだが、騎士などにはなりたくないと思った。ある日伯爵は息女に対して犯した罪を思い恐れ、ルーアンの大司教の許へ赴いて告解し、十字軍士となった。チボー殿は善き殿が十字架を奉じられたのを知って自らも告解し十字軍士になった。伯爵の子息は、父親と愛する義兄のチボー殿がそうなったのを見て、彼も十字軍士となった。父親

はそれを見て考え込んだ。そしてこう言った、「息子よ、何故君は十字軍士になったのだ。そうなれば領地は空になってしまう。」子息は答えた、「父上、私は神と父上にお仕えする為に十字軍士になりました。」伯爵は身仕度して出発し、聖地に向った。チボー殿と子息はその身も財も共に危険にも会わず彼の地に着いた。三人は神に仕えるべき土地の行く先々でいとも気高く巡礼を行った。伯爵はこれをなし終えた時、更に善行を積み重ねようと考えて、エルサレム聖堂の奉仕に献身すること一年、彼と共に二人も務めた。一年が終りに来た時、領地や親しい人々を訪れたいと思った。そこでアッコンに人をやって船を誂えさせ、聖地に暇を乞うてアッコンに至り、海上に出たのである。

十三

順風を帆に受けてアッコン港を出たが、それは永続きしなかった。外洋に至るや激しく恐しげな風が吹き、水夫達もどこへ船が向うか判らぬ程だった。今にも溺れるかと思い思い、皆、息子は父と、姪は甥と抱き合った。三人は余りにもしっかり抱き合ったので引き離すことができない程だった。そんな風にして暫し行くと陸地が見えた。水夫等にそれが何処かを問うと、彼等は答えた、「サラセン人の土地でアルメリアと呼ばれる国でさあ。」更に「旦那、どうします。」「このまま船を走らせよ。溺れる程怖しい死に方はほかにないからな。」船の一行はまるで漂流物のようになってアルメリアの沖合いにやってきた。ガレー船その他の船がサラセン人を一杯載せて近寄ってきて、一行を捕え、サルタンの前まで引き連れ、その所有品の全てを捧げた。サルタンは一行の人々を選り分け、別々の牢屋に入れさせた。伯爵と子息は固く抱き合っていたのでこれを引き離すことができず、二人

だけの牢に入れた。ここに入れられたのは二人にとって不幸であり、伯爵親子は病気に罹った。

十四

その後、サルタンの誕生日を盛大に祝う日が来た。宮廷には大勢の人々が詰めかけた。ご馳走のあとで、射手やトルコ兵等がアルメリアのサルタンの前に出て言う、「殿様、我々にもご褒美が戴きとうございます。」サルタンは問うた、「何が所望じゃ。」そこで彼等は言う、「殿様、捕虜を一人、矢の的にする為に。」サルタンは言った、「牢へ行って、命の残り少い奴を連れて行くがよい。」彼らは行くと伯爵を連れてきた。髭茫々で髪も伸び放題、衣のようになって垂れ下がっていた。サルタンは彼らに行った、「此奴はこれ以上生き永らえても仕様があるまい。よし、連れて行け。」サルタンの妃となっていた奥方はその場に居た。伯爵を見て憐れみを催し、こう言った、「殿様妾はフランス語を存じています。この哀れな男に話しをしてもよろしゅうございましょうか。」「よい。」彼女は伯爵の所に行って、何者で、何処から来たのかを尋ねた。彼は答えた。「お妃様、拙者はフランスのポンチューと申す地から参りました。」「身分は。」「お妃様、出立致した時にはその地の領主でありました。」これを聞き終ると彼女はサルタンの所に戻って言った、「殿様、この囚人をどうか妾に下さいまし。この男、将棋や双六（トリクトラック）を知っておりまして、私たちの前でやって見せ、教えても呉れましょう。殿様と二人きりでいささか寂しゅうございますが、この者が気を紛してくれましょう。」「アラーの神かけて、好きなようにしなさい。」彼女は自室に行かせた。牢番は再び牢に行って、今度はチボー殿を連れて来た。髭も髪も生え放題、身は削げ落ちて痩せ細っていた。妃はそれを見て言った、「殿様、よろしければ、この者と話をしてみたいのです

が。」「妃よ、アラーの神かけて、してよいとも。」彼女は彼の傍に行って、何処から来て、何者なのかを聞いた。彼は言った、「お妃様、拙者はあの老公の領地から参った騎士で、その姫をもらいうけました。」彼女は夫のサルタンの所に戻って言った、「殿様、広い御心によって妾にこの者をお与え下さいまし。遊びを何でも弁えておりますので、遊び相手としてはお気に召すものと存じますが。」「妃よ、そなたに呉れてやる。」サルタンはこう言って先の囚人の居る所に行かせた。射手達は急いて言う、「殿様、我々へのご褒美はまだでございますか。」牢へ行って子息を連れ出したが、非常に美事な髪の毛で被われていたものの髭は無く、自分の足で立っておれない程弱っていた。妃はそれを見て憐れみを催し、言った、「またこの者と話してよろしゅうございますか。」「妃よ、いいとも。」彼女は彼に、何者でどんな身分かを尋ねた。彼は言った。「お妃様、最初の老人の息子です。」妃はこれを聞いてサルタンに言った、「殿様、この者をどうか妾に下さいまし。将棋や双六、それに楽しい物語を沢山知っておりますので。」するとサルタンは言った、「アラーにかけて、たとえ百人であろうと、喜んでそなたに遣そう。」妃は先の二人の所へ彼をやった。そこで再び牢へ行き、別の男が引き出された。彼女は話しかけたが、全く知らない男であった。この男は引き渡されて殉教した。

十五

その場から出来るだけ早く立った妃は、捕虜達が居る自室にやって来た。彼女が来るのを見ると彼らは立ち上がろうとしたが、彼女はそのままじっと座っているように合図した。彼らの傍にくると、伯爵が彼女に聞いた。「お妃、我らは一体何時殺されるのですか。」妃は言った、「まだまだそのような事には。」彼は言う、「悲しい

ことに、我々は飢えて気を失いそうです。」それを聞いて妃は部屋を出て、肉を料理させた。それを運ぶと手ずから切り取ってひと口ずつそれぞれの口に入れてやり、飲み物を与えた。彼らは食べ終ると以前にも増して空腹を覚えた。そこで彼女は一日十回に分けて、一切れか二切れずつ食事を与えた。彼らは夜にはぐっすり寝た。このようにして丸々一週間、食事をそれも毎回少しずつ与え、彼らがすっかり元気になった時には、肉も飲み物も好きなだけ与えた。将棋や双六をもらいうけて遊び、大いに楽しんだ。サルタンも喜んで同席し、彼らの遊ぶ様を見ているのだが、妃はその場でも自分の事が彼らに見破られぬよう細心の注意を払った。

十六

その後間もなくサルタンに用事ができた。というのは彼の領地を隣国のサルタンが荒し、それに報復するため人々を集めたのである。妃はそれを知ると捕虜たちがいる部屋に来たが、彼らはそんな事に慣れていて、彼女が出入りする度に動いたりはしないのだった。妃は彼らの前に席を占め、彼らを呼んでこう言った、「そちたちはこの前、自分のしたことを少し話しましたね。妾に話したことが本当かどうか今日は知りたいのです。あなたはポンチュー伯で息女があった、そしてこの者があなたの子息であると言いましたね。妾はサラセンの女で魔術の心得があります。だからあなたが本当の事を言えば、こうして今恥ずべき死の間近にあることから救って差し上げられます。妾にはあなたが真実を言うかどうか判るのです。あなたの息女、この騎士と結婚したという、その方はどうなりましたか。」「お妃様、拙者の考えではもう死んだと存じます。」「どんな死に方でしたか」、と妃、「あれに相応しい死に様で。」「してどんな。』と妃。伯爵は、彼女の結婚と、世継ぎを仲々産み得なかった事を

話し始める。……良き騎士はサン・ジャック様への巡礼を誓い、彼女は同行を求め、彼はそれを許し、出立し、進んだ。二人は供を連れずにある場所へ差しかかった時、森の中で盗賊に出会ったのです。騎士は盗賊の全員を相手にすることはできず、三人を打ち果したものの残る五人が彼を捕え、彼女共々衣服をはがしたのです。そして両手両足を縛り上げて棘の茂みにほおり込んだのです。賊たちは奥方の美しいのに目をつけ、それぞれが我が物にと思いましたが、結局五人皆が彼女と寝ることに衆議一決したのです。やり終えると彼らはその場を去り、彼女は残りました。善良な騎士は彼女を見て優しく頼みました、「奥よ、私の縛めを解いて呉れたまえ、ここを出よう。」彼女は賊の一人が落した剣を見て、それを手に取ると騎士の方へ向い、大いに怒りを発しつつこう言いました。「縛めを解いて差し上げます。」抜き身をかざすや、それで騎士の体を刺し貫こうとしたのです。神の思召と自らの力とによって騎士は身を翻えしました。剣は縛めに届き、それを切り、騎士の腕を傷つけました。両手が自由になったので、騎士は両足の縛めを解いて、傷つきながらも立ち上り、彼女に言いました、「奥よ、願はくば、もう私を殺さないで呉れ。」彼女は言いました、「口惜しゅうございます。」

「ああ、妾にはよく判ります。あなた様の言葉が真であること、また何故彼女が彼を殺そうとしたのかが。」「お妃様、何故なのですか。」「彼女が受けた、それも殿の目の前で受けた恥辱の為なのです。」チボー殿がこれを聞いた時、さめざめと泣き始めてこう言った、「何と痛ましい事だ。一体どんな罪を彼女が犯したというのだろう。お妃様、もし神の思召でこの牢獄から出られるとすれば、それ以上の悪さを神が犯し給うことはないでしょう。」「騎士殿、彼女はそんな風には考えなかったことでしょう」、と妃は言った。

十七

「それで、どちらの方が良いとお考えなのかしら、彼女が生きている方か、それとも死んでいる方か」、と妃。「生きているかどうか判りません」、と皆が言う。「お妃様、その故に我らが厳しい仕返しを受けたという事を、拙者は身に染みております」、と伯爵は言う。「ではもし神の御心に叶って彼女がその刑苦から逃れ、その後の彼女の身の上を聞けるとしたら、どう思われるでしょうか」と妃は言う。伯爵は、「お妃様、たとえこの牢から解き放たれ、その上かつて所領のものと同じ位の領土を得たとしても、それを聞く喜びに優りませぬ。」チボー殿は、「たとえ世界一の美女を得てそれを王妃とし、フランス王国をわが物にしたとしても、その知らせを聞く嬉しさには勝りません。」若者は言う、「これ程の喜びに優るものを誰も与えたり約束したりできないでしょう。」妃はこれらの言葉を聞くと、優しい気持になって言った、「神よ讃えられん事を。あなた方の言葉の中に嘘、偽りはありませんね。」三人は声をそろえて言った、「ございません、お妃様。」妃はいとも優しく泣き始めた。「殿様、実はあなたは私の父上、私はあなたの娘。そしてあなたはわが旦那様。そしてあなたは私の弟なのです。」これを聞くや、三人は大いに喜んだ。彼女に近よって跪こうとしたが、それを制して彼女はこう言った、「妾はサラセンの女。今そちたちが耳にした事で、これまでより目立った振る舞いを示してはなりません。今まで通りにして、妾にまかせて置くのです。何故妾の事を明かしたのか申しましょう。我が殿サルタンが出陣しなければなりませぬ。妾はそちたちの事をよく存じています。それで求めるのですが、殿のお供をなさい。まともな騎士であるのなら、今それを示してもらいたいのです。」彼らは黙り、彼女は立ち上ってサルタンの所へ向い、そし

てこう言った、「殿様、戦さの話を聞きつけて、妾の囚人の一人が殿のお供を仰せ付かりたいと申しております、もしお許しがあれば。」彼は言う、「妃よ、それは難しい。私を裏切るかも知れぬから。」彼女言う、「心安くせられませ。後の二人を妾が留め置きます程に、もし先の者が裏切るようなことがあれば、残った者達の首を吊り下げましょう。」「妃よ、その者に馬と武具その他入り用の物を与えてつかわす。」これを聞いて妃は部屋に戻り、言った、「あなた、サルタンのお供をして頂きます。」すると彼女の義弟が跪いて頼んだ、「神かけて姉上、僕に行かせて下さい。」「駄目よ、そんなことをすれば、事が露顕致しましょう。」

十八

サルタンは出陣し、チボー殿はその供をして敵地にやって来た。サルタンは必要なもの全てを彼に与えていた。神の思召と他の者達の助けを得て、チボー殿は瞬く間に敵のサルタンを屈伏させた。サルタンはチボーを気に入った。大勢の捕虜を伴って凱旋し、妃の許に来て言った、「妃よ、アラーの神かけて、そなたの囚人はよくやりおったぞ。もし広い知行地を望むなら、与えてやってもよい程じや。」彼女は答えた、「殿様、アラーの神を信心しておりませぬから、そんな事は望みますまい。」二人はそこで黙った。それから彼女は向き直ってこう言った、「殿様、妾は妊っております。それで気分が優れませぬ。」それを聞いて言った、「たとえ私の領土が二倍に増えたとしても、これ程嬉しくはないぞ。」彼女は言った、「殿様、ご出陣の後、食べることも飲むことも気持よくありませんでした。年寄りの囚人が申した事ですが、もし良い気候の土地でなければ、妾は死ぬかもしれませぬ。」「妃よ、そなたが死ぬなんて滅相もない。何処へ行きたいのか、はっきり申せ。その土地へ行かせ

るから。」彼女は言う、「殿様、どこであろうと構わないのです。唯この島の外ならば。」サルタンは大層美事な船を誂えさせ葡萄酒や肉を積み込ませた。「殿様、年寄りと若い囚人に供をさせます。二人は妾の前で将棋や双六をして呉れるでしょう。それと王子を慰めに連れて参ります。」彼は言う、「妃よ、して三人目の囚人はどうするのじゃ。先の二人よりこの男を供にする方が良いと思うが。陸であれ海であれどこでも必要な折りにこの男がそなたを守ってくれるであろう。」彼女答えて、「殿様、では喜んで供をさせましょう。」船の準備成って、出航した。外洋に出ると直ぐに水夫らが妃に言った、「この風に追わせると、真直ぐブリンディシに行きますぜ。」彼女はこう言った、「風に任せなさい。妾はフランス語ができますもの、何処なりとお前達を案内して上げましょう。」

十九

そして一行は無事、港に到着し上陸した。妃は彼らに言った、「皆様、前の言葉をしっかり思い出して頂きとうございます。妾がそう望めば、今でも後戻りさせることができるのです。」そこで彼らは言う、「我らは秘密にすべき事を口外したりは致しません。」「皆様、これは妾の息子です。この子をどうしたら良いでしょうか」、と彼女は言う。「大いなる富と名誉とで迎えられましょう。」「皆様、妾はサルタンから多くの物を奪い取ってしまいました。我が身ばかりか、彼の息子までをも奪ったのですから、あの方からこれ以上のものは奪えません。」彼女は船に乗っている水夫達の所に戻って言った、「さあ船を戻して、サルタン様に、我が身とあの方の王子を奪いその牢から、我が父と夫と弟とを連れ出した事を知らせなさい。」水夫達は大いに悲しんだが、出来るだけ

早く船を戻した。

二十

伯爵は仕度を整え、商人や、快よく貸してくれたテンプル騎士団から必要なものを手に入れた。仕度が出来るとそこを出発し、ローマへ赴いた。伯爵は皆と一緒に教皇様の御前に出た。教皇様に銘々が告解し、これを聞き届けられた教皇様は、この世で神が示された奇蹟と大いなる御業を大いに喜びとされた。子供に洗礼を受けさせてギョームという名を与えられた。次いで奥方を正しきキリスト教徒に戻され、彼女と殿の結婚を正しいと認定され、各々の誤ちの悔い改めを命じられた。その後一行は、大いなる喜びの内に、久しく帰りを待たれていた故国へと戻った。人々は喜びに湧いたのであった。

二十一

一方、船はブリンディシから引き返し、アルメリアに帰着した。伝えられた知らせにサルタンは大層歎き悲しんだ。残っていた王女は、サルタンを愛した。彼女は成長し非常に美しくなった。

二十二

さてポンチューの伯爵は、子息を騎士にした。立派に成長したのも束の間、長生きはしなかった。ある大祝宴にポンチュー伯も連なっていたが、そこにラウル・ド・プレオ殿と言われるノルマンディの貴族がいた。このラ

ウルには大層美しい娘があった。ポンチュー伯が話しをして甥のギョームとその娘との結婚を決めた。このラウルには他に相続権者が居なかったからだ。ギョームは彼女を娶ってプレオの領主になった。国は大いなる喜びに包まれた。またチボー殿は神の思召で、その妻によって二人の子息を得た。伯爵の子息が亡くなり、立派な葬儀が営まれた。サン・ポル伯は存命していた。チボー殿の子息たちはこれで二つの伯爵領の相続権者となり、後にこれを相続したのである。善き奥方は深い悔い改めのうちにお暮しになり、チボー殿は非の打ち所のない騎士であった。

二十三

話し替って、サルタンの許に残った姫はいとも美しく成長して、囚れの美女（ベルシェチヴ）と呼ばれていた。勇猛な一人のサラセン人がサルタンに仕えていたが、バグダッドのマラキンという名であった。美しい姫を見てこれを強く望んだ。そこでサルタンに申し出た、「殿様、いつまでも忠義を励みます程に、頂きたいものがございます。」サルタンは、「マラキンよ、何を。」「殿、思い切って申し上げます。拙者には及びもつかぬ高嶺の花なれど、申し上げようかと……。」サルタンは言う、「すんなり申すがよい。」彼は言う、「殿、お姫様のベルシェチヴを。」「マラキンよ、良いともそちに遣わそう。」サルタンは彼に与え、彼は彼女を妻にして、大いに喜び、丁重に故国へと連れ帰った。真実が証明しているように、この女から、あの文武両道に秀でたサラディンの母親が生まれたのである。

訳者後記

武勲詩の時代は既に終ろうとしている。封建制の安定と共に、武勇に代る価値が賞讃される時代である。十二世紀の後半、クレチャン・ド・トロワを代表とする宮廷風騎士道物語が流行し、世紀末には冒険物語が登場する。『ポンチュー伯の息女』（十三世紀初頭）はその中の一篇だが、しばしばフランス最古の散文による中篇小説と称される。この物語の栄光はしかしそれだけにかかっているのではない。訳出されたA本に続くB本、更に十五世紀の『ジャン・ダヴェーヌ物語』、『ボードワン・ド・スブール』等によるA、B両本の焼き直しとサラディン出生に関する部分の大増補、それに伴う出生伝説の流行、十八・九世紀には、五種を越える翻案の戯曲、詩がこの物語の成功を証明している。これとは無縁な我が国の読者にとって、仮令この物語を読んだことが無くとも、作品名を有名にしたのは、黒沢明の『羅生門』との類似である。黒沢は芥川竜之介の『藪の中』を原作に採った。芥川は今昔物語を下敷きに使った、と同時に彼がウィリアム・モリスの『ポンチュー伯の息女（十九世紀英訳版）を読んでいた、と推測したのは佐藤輝夫氏である。『羅生門』と『ポンチュー伯の息女』とを結ぶこの肝腎な点が、関東大震災のせいか、想像だけに終っているとは言え、多くの日本人が大いにありそうな事だと考えている筈だ。

問題の類似とは「森の中で、女が夫の眼前で賊に犯され、その直後夫を殺そうとする」モチーフである。物語の成功の原因の大きな部分がこれにかかっている。古来、この女の心理の謎解きが試みられているが、大別して、女に好意的なものと、そうでないものとに分かれるだろう。好意的とは、夫を殺そうとしたのは夫への愛情に由来し、夫のチボーが妻の受けた不名誉の思い出を持ちつつ生きていく事に彼女が堪えられないからだという

のだ。

筆者は、些か彼女に冷い見方を取る側に与している。原文は彼女の心理を克明に描いたりしない。それどころか単調なまでの簡潔さで、唯エピソードの積み重ねだけで全体が貫かれている。A本で彼女に付与された形容詞はたった一つ、「美しい」だけである。しかし不詳の作者Xは事実の羅列の中に真実を語っていると言えはしないか。

奥方はチボーを殺し損って口惜しがる（夫＝証人を殺しさえすれば自分は安泰だったのに）。サルタンから求愛されると「嫌々それをするよりは進んでする方がまし」だと言って、信仰を（簡単に）棄てて妃に収まる（サンタルチアのようにはいかずとも、他に方法はなかったのか。チボーを愛しているなら断固として拒絶できなかったか。）その後、チボーとの結婚生活では五年間子宝に恵まれなかったにもかかわらず、サルタンとの間には結婚後「程なくして」一男一女をもうける（まま、ある事らしいが）。偶然、捕虜となって彼女の近くに来た三名の近親者に苛酷な入牢をさせておく（これは樽詰めにされた事への復讐である。）見落してならないのは、サルタン出陣の折り、従軍を買って出ようとする伯爵の子息を差しおいて、夫チボーを指名する条りである（彼女は、チボーの戦死を望んでいたのではないか。それに対してチボーは、マルシルへの使節にロランの提案によって指名されたガヌロンのようには恨まない）。最後に決定的なのは（島国での生活に飽いた奥方が）サルタンを騙して逃亡する際に、当初チボーを連れてゆこうとしなかった点である（もしチボーを連れて帰れば彼女は再び、忌しき森の中へと引き戻されてしまう）。要するに筆者には、彼女がサンチャゴ巡礼途上に起きたあの一件以来、一貫してチボーを抹殺したいと思い続けていたのだと、作者が語っているように思えるのだ。

翻って伯爵、チボー殿、伯爵の子息そしてサルタンの四人の男達はどうか。仲々に勇猛だが、温情厚く、愚直なまでに善良である。子息に至っては、女性に対して厳しい態度を取らねばならず、それ故に苦しまなければならぬのが騎士の務めならば、いっそ、なりたくないとまで思うのである。

さて物語の背景には、動き廻る商人達や金融業に精出すテンプル騎士団の姿が垣間見られる。武力の支配する時代、そして騎士道がどうのこうのという時代の終焉を、作者は、現実適応能力に富む一人の女性の数奇な運命に託して描き出したとは言えまいか。

テクスト La Fille du Comte de Pontieu, éd. par C. Brunel, CFMA, 1926（他に同編者による SATF 版 1923もあり、両者共、A、B本を収めている）。

参考文献 （右の CFMA 版の Introduction の他に）

T. SATO, Trois Figures de la Femme, A propos du film japonais *Rashomon* et de la *Fille du Comte de Pontieu*, in Mélanges...Rita Lejeune, Gembloux, 1969.

A. ADLER, La Fille du Comte de Pontieu et Herchanbaut de Pontif, Personnage de *Raoul de Cambrai*, in Romania LXXI, 1950.